

# あるむぜお110

府中市郷土の森博物館だより

a/museo NO. 110

2014年12月20日



新展示「古代国府の誕生」コーナー

## 目次

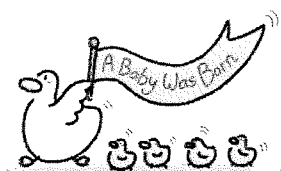
- 1-2 常設展示室リニューアル！  
③「古代国府の誕生」
- 3 展示会案内  
すほっと展示 発掘された奈良時代の暦
- 4-5 ノート 文政4年の用水騒動
- 6 多摩川あさかな考  
③川を下るアユ
- 7 最近の発掘調査  
美好町で旧石器時代の遺跡を発見！
- 8 連載 天文・宇宙の最新動向  
⑦「はやぶさ2」宇宙へ

## 常設展示室リニューアル！

去る10月4日、本館2階の常設展示室がリニューアルオープンしました。前号と前々号では進捗状況などについてご報告しましたが、今号からは完成した常設展示室の見どころを2回にわたり紹介します。

## ③「古代国府の誕生」

古代に武蔵国の国府が置かれたことは、府中の歴史にとってとても大きな出来事でした。新しい展示室では、当時のマチの様子を発掘調査の成果に基づいて復元した大きな模型があり、国司の人形が迎えてくれます。



# 常設展示室リニューアル！

## ③「古代国府の誕生」

### 常設展示室リニューアル完了

このたび、約 1,300 m<sup>2</sup>の常設展示室のリニューアルが完了しました。リニューアルにあたっては、いくつかのコンセプトもあるのですが、最も意識したのは〈府中らしさ〉です。

そうした考えのもと、新しい展示室では「くらやみ祭」「古代国府」「近世府中宿」を扱うコーナーを大きく取り上げています。これによって、他の博物館とは違った個性豊かな博物館に生まれ変わったのです。

### これぞ府中！「古代国府の誕生」

なかでも、古代国府を扱った「古代国府の誕生」のコーナーは、1975年以來の発掘調査と研究の成果をふんだんに取り入れた、全く新しい展示空間です。そのボリュームと内容は、府中ならではの

国府の中枢となる国衙の建物の一部を原寸大で復元し、その奥にしつらえたケースでは厳選された多様な出土品を紹介しています。武蔵国内の各郡が建物の建造に協力したことを示す郡名瓦・埴、都から赴任した国司の役職を記した土器、様々な人々が集住していたことを物語る各種農具や工具、

大陸・半島からもたらされた高級陶磁器や金属器、東京最古の寺院である「多磨寺」の瓦など、まさに長年にわたる調査の積み重ねで得られた出土品を一堂に見ることができるのです。

### 復元！奈良時代の国府のマチ

こうした出土品とともに、リニューアルの目玉ともいべきものが、「国府のマチ」を復元した模型です。国衙を中心として、東西 3.2km、南北 2.2km の範囲の景観を、発掘調査の成果に基づきながらも推測と想像をまじえて製作したものです。模型の大きさは 7.3 × 5 m もあります。時代設定は、750 年前後、聖武天皇の詔によって、国分寺の造営が始まってしばらくした年代で、ちょうどこの頃には、国衙の主要な建物が瓦葺に改修整備されています。

国衙を中心に広がるマチには、縦横に街路が延び、マチの西端近くには幅 12m の国道も走り抜けています。マチの中には、都から赴任してきた国司の居宅や、国内各郡の出先機関、国衙に収まりきれなかった分庁舎のような施設が点在し、その間を縫うように 630 棟もの竪穴建物からなる庶民の居住施設があります。

この模型は、1/450 という縮尺のため、人形を配置することはできませんでしたが、マチの人口は 2,000 人近かったものと推測できます。古代においては、まさに地方都市と言ってよい規模の巨大な集落だったのです。そしてこの古代のマチこそ、今日につながる府中の街の原型となるのです。

1300 年近く前の府中、そのマチの広がりや景観、構造など、是非ともじっくりとご覧いただきたいと思います。（深澤靖幸）

国府のマチの模型（部分）



## 奈良時代の暦

## ●奈良時代のカレンダー

リニューアルされた常設展示室の「古代国府の誕生」コーナーでは、発掘された〈奈良時代の暦〉を展示しています。暦は、今ふうと言えばカレンダーのことです。

奈良時代、暦は朝廷で毎年製作され、諸国の国府ではこれを都で筆写して持ち帰り、使用することになっていました。今日のカレンダーは月めくりが主流で、1週間ごとに規則正しく並べられ、しかも曜日以外の情報は何も書かれていないものが少なくありません。しかし、奈良時代の暦は、1年分だと6mにもなる巻物で、1日毎に1行が当てられ、日付と干支、そして立春・立夏・立秋・立冬といった事項や、吉凶や禁忌などの情報が記されたものでした。吉凶や禁忌などの情報が具に記されているため、こうした暦を具注暦と呼んでいます。

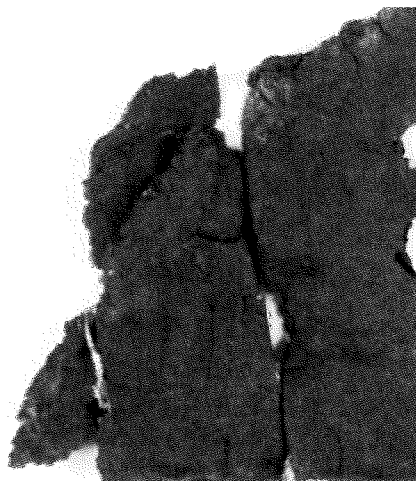
## ●なぜ腐らなかったのか

今、展示している暦は、こうした具注暦の断片です。府中市の北端にある武蔵台遺跡の奈良時代の竪穴建物跡から出土しました。もちろん、材質は紙ですから、腐らずに残っていたのは奇跡と言ってよいかもしれません。ただ、腐らなかったのにはそれなりの理由があります。漆が浸み込んでいたため、腐食を免れたのです。

当時、紙はまだまだ貴重品でしたから、再利用するのが普通でした。もちろん、裏面を使用することも多かったのですが、この暦はすぐさま、漆を扱う工人の下に払い下げられたようです。漆工人たちは、漆液が乾燥とホコリを嫌うため、容器に紙で落し蓋をして保存していました。つまり、漆工人の手に渡ったために、この暦は腐ることなく残ったのでした。

## ●何も見えない！

さて、展示している具注暦を見ると、そうです、



出土した具注暦の断片（部分）



左の部分の赤外線画像

こげ茶色をしていて、どんなに目を凝らしても文字なんか見えないではありませんか。

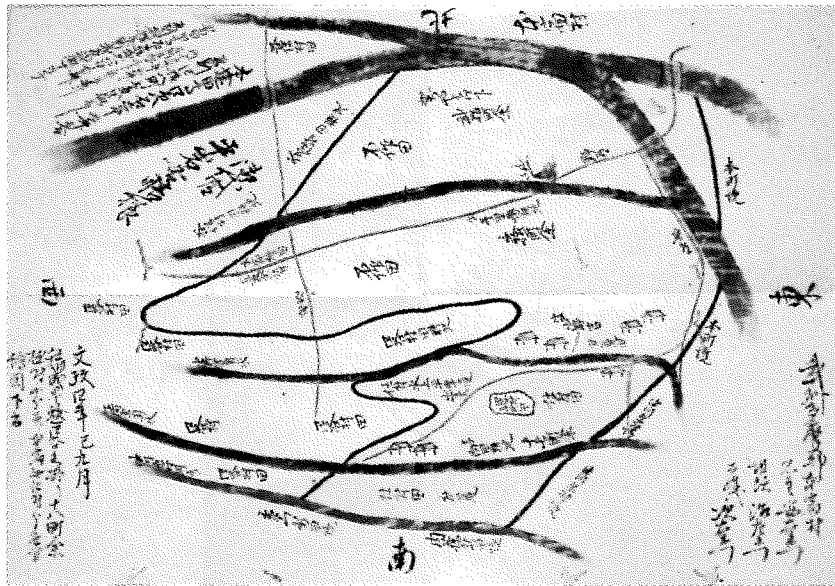
ところが、これに赤外線を照射して特殊なカメラを通してみると、不思議なことに文字が浮かび上がるのです。長い年月の間に表面が荒れてしまっているため、判読不能の文字も少なくありませんが、それでも、13行、100文字ちょっとの文字が確認できるのです。

## ●日付もないのに、なぜ暦？

でも、判読した文字に何月何日とか、丙午といった干支に相当する文字はありません。

しかしながら、特徴的な語句が書かれているため、暦であることは明らかです。さらに、語句の配列を分析すると、この断片は①天平6年(734)、②天平勝宝9年(757)、③承和4年(837)、④貞観2年(860)の4つの年のいずれかの暦で、同じ竪穴建物から出土した土器の年代も参考にすれば、天平勝宝9年の暦の可能性が最も高いと判断できるのです。

この暦は、今年3月、東京都の文化財に指定されました。暦の断片は漆が浸み込んでいるとは言え脆弱なため、1年中展示することは控えています。今のところ、3月までが展示予定となっています。華やかな展示品ではありませんが、この機会にぜひご覧ください。(深澤靖幸)



田への植付けの有無を描いた文政4年の絵図  
本宿村のうち小野宮の田んぼの絵図。田植えができたのは18町余りだと記されています。絵図中「仕付田」とあるのは「不作田」の3分の1程度です。

### ▼ はじめに

年貢を米で納めていた江戸時代の人々にとって、天候不順による収穫量の減少はとても大きな問題でした。このため、祈禱や呪いなどにより天候の好転を願い、村内や他村の人々と協力して農作物への影響を少なくするように努めました。

しかし天候不順が続き、田畑への被害が現実のものとなると、悠長に構えてはいられません。文政4年(1821)の旱魃の際に、現在の府中市域で起こった用水の使用をめぐる騒動でも、多くの村人が利益を守るために行動を起こしました。今回は、この騒動をとあして、江戸時代の社会について、考えてみたいと思います。

### ▼ 水不足となった四ッ谷用水

文政4年の4月以降はあまり雨が降らず、多摩川の水が減少し、そこから取水していた用水路にも十分な水が流れなくなりました。当時は、およそ旧暦の3月下旬から4月にかけて苗代に種を蒔き、5月に田植えを行っていたので、その大事な時期に水が足りなくなりました。

多摩川から水を引いている用水路のひとつに四ッ谷用水があります。現在の四谷6丁目取水口が設けられていたこの用水は、府中市域の南

西に位置した、四ッ谷村(現 四谷)と中川原村(現 住吉町)、連光寺村のうち下川原(現 南町)、本宿村のうち小野宮(現 住吉町)の人々によって利用されていました。府中産線の下にあるこれらの地域には、4か村の田んぼが入り交じっていて、普段はまるでひとつの村のように睦まじく農業を営んでいたといえます。ところが、この旱魃により、四ッ谷村VS中川原村・下川原・小野宮という構図で争いが起こってしまったのです。

これから、この経緯をご紹介しますが、中川原村・下川原・小野宮は四ッ谷用水の下流にあたるので、以後「下3か村」と記すことにします。

### ▼ 四ッ谷用水の分配をめぐる争い

事の発端は、水不足にもかかわらず5月16日に四ッ谷村の三左衛門が田植えを始めたことでした。上流にある四ッ谷村が用水を使用すると、「下3か村」には水が行き直らなくなります。慌てた中川原村と下川原は四ッ谷村に相談に赴き、翌17日から20日までは四ッ谷村では用水を使用せず、「下3か村」に水を引く約束を取り付けました。ところが、その最終日である20日に、四ッ谷村名主の太兵衛が水を引き、田植えを始めたのです。

この事態に「下3か村」の主立った者たちが、22日夜に太兵衛のところに談判に行きましたが、太兵衛の返答は一日たりとも四ッ谷村の下に水を流さないというものでした。結局、村同士の話し合いでは埒が明かず、「下3か村」から代官所の指示を求めた願書が出されました。

それを受けて代官所の手付・高山市蔵が訪れたのは24日のことでした。見分の後、26日から28日までは「下3か村」が水を使用することを指図され、それに太兵衛も従ったようです。その後、「下3か村」が少量の田植えしかできなかったために再度見分を願い、6月17日以降は、夜中と日中に時間帯を分けて使用するという一方で、四ッ谷村と「下3か村」の合意のもと議定書が取り交わされました。

#### ▼「下3か村」による実力行使

このように、争いの要因であった用水の分配については、2度の代官所の見分により、双方納得して決着がつけました。ところが、最初の見分の前日、田植えに適した時期が過ぎていくのに業を煮やした「下3か村」の村人たちが、四ッ谷村へ押しかけ、自分たちの村に水を引くために、水口の掛樋などを打ち壊していたのです。そして、そのことを代官所に訴えようとした四ッ谷村の太兵衛と八右衛門を、本宿村の一里塚（現 日新町）の辺りで捕まえ、多人数で暴行を加えました。

この事件を取り調べるために、今度は代官所の手代・赤羽九十郎が25日に見分に訪れました。お役所仕事としか言いようがありませんが、24日に訪れた高山市蔵は、あくまでも用水の分配に関することしか担当せず、この件には別の役人が派遣されたのです。

その夜、赤羽九十郎の宿泊先となった府中宿の万屋に関係者が呼ばれ、そのうちの4人が手鎖を命じられました。翌26日、この事件を示談にするべく、谷保村（現 国立市）・屋敷分村（現 美好町）・番場宿（宮西町）・新宿（現 宮町）・是政村（現 是政）から6人の者が仲裁に入りましたが、太兵衛は承知しません。このため、28日夜に再度取調べが行われ、暴行を加えた14人が手鎖となりました。同日、再び仲裁が入りましたが太兵衛が断り、取調べの場は江戸に移ります。6月17日、勘定奉行所で取調べが行われ、その際の態度が悪かったことで3人が入牢を命

じられました。

事件が起こってから1か月以上を経た7月4日、今までとは異なる仲裁人が間に入り、「下3か村」から四ッ谷村へ詫証文を入れて、壊した掛樋などを仲裁人が造り直すことで、やっと示談が成立しました。この争いで「下3か村」が支払うことになった費用は約75両で、3等分しても各村の負担は約25両にもおよびました。

#### ▼おわりに

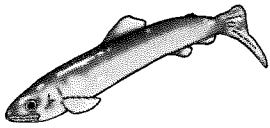
現在の私たちの感覚では、四ッ谷用水の分配をめぐる争いは、代官所の指図を受けて解決できるのに、集団で騒動を起こし25両もの費用を支払うのは、間尺に合わないような気がします。しかし、この早魃の際に騒動を起こしたのは「下3か村」だけではありません。多摩地域の他村でも同様の騒動が見られるのです。

稲城領では菅村（現 川崎市）の者を中心に300人余りが集まり、関戸用水の堰を切りに行ったという記録が残っています。また川崎領の村々では、代官所の指図を守らず水を堰き止めた者の所に大勢で押しかけ、家を壊し土蔵の穀物や衣類を切り散らしました。そして、その者が江戸に逃げると、鍬と鎌を持ち江戸市中を尋ね歩いたといい、あまりの事態に見分に来ていた代官所の役人も江戸に逃げ帰ったそうです。

江戸時代には、代官所などの公的権力に訴えて解決を願うことと、公的権力に依らずに私的な実力行使で権利の回復を図るという江戸時代以前からの慣習が併存していました。だから、四ッ谷村の太兵衛は「下3か村」との申合せに反して田植を始め、「下3か村」の村人たちは代官所の役人を待つことなく、自分の田に水を入れるための行動を起こしたのだと考えられます。

そして事件が起こると、代官所などの取調べと並行して、近隣から仲裁人が入り示談による解決が図られました。取調べを行う側もまた、地域内部での解決を奨励したのです。

このような視点から、四ッ谷用水をめぐる騒動を考えると、現代とは異なる江戸時代の社会の特色が見えてきます。あわせて、当事者の行動を各人の立場から見直すと、当時の社会通念を知ることができると思います。そこに、現在との差異や共通点を見出すことが、歴史を学ぶ醍醐味のひとつではないでしょうか。

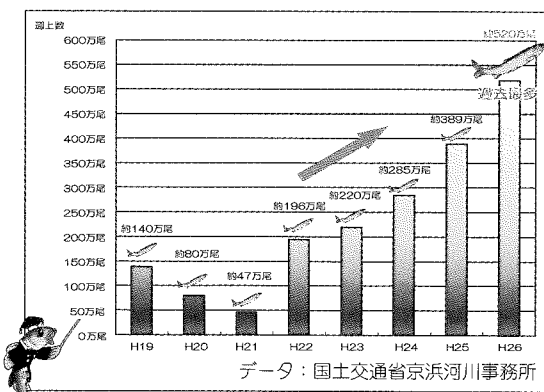


## ③川を下るアユ

秋から冬へとまたたく間に季節は移り変わり、多摩川の景観も少々寂しく感じられます。水中を賑わしていたオイカフやウグイ、そしてアユといった夏の主役たちは、気のせいかもしれませんが動きも鈍くなり、冬の寒さに備える雰囲気を感じ出しています。そんな中、着々と多摩川の代表種に振り返りを狙うアユの動きに注目してみたいと思います。

かつては多摩川の魚と言えばアユがその代表でした。70年代の初め、公害による水質汚染で多摩川から一時姿を消し、その座を失いました。しかし、その後の下水処理場完備などによる水環境の復活で再び多摩川に戻るようになったのです。アユは遡上性の魚であり、多摩川で生まれたアユの仔魚は東京湾で成魚となってから古巣に帰って来ます。府中を流れる中流域でも遡上数は増え、夏の間は活発な動きを見せてくれました。近年相当数の遡上が確認されているアユですが、今年は過去最多の520万尾を数えました。平成19年(2007)の140万尾から徐々に増えてきたのは、多摩川下流の大田区調布取水堰の可動堰を開放して水位差を無くしたり、障壁になっていたその他の堰に魚道を完備させたことによる効果が考えられています。

●アユ遡上数(推定値)の経年変化



さて、その戻りアユは秋になると他の魚には見られない行動を起こします。それは、下流域を

指して川を下る動きです。寿命をまっとうするために、そして最大の仕事「産卵」を成すために、落ちアユとなって下流域を目指すのです。

多摩川アユの産卵期間は、日中の最高水温が20℃を下回る10月中旬ごろに始まり、最高水温が16℃を下回る12月上旬頃にはほとんどが終了します。アユは水温の変化に敏感で、夏が過ぎて水温が低下し始めると、台風などの増水の流れに乗って川を下り始めます。これが「落ちアユ」です。そして多摩川中のアユは、中下流域の産卵場所近くの平瀬に集合し、ここで卵が成熟するのを待って、いよいよ産卵を始めます。水温が18℃～16℃の頃に産卵はピークを迎えます。時期的には11月中旬～下旬頃が最盛期でしょう。約半月で孵化した仔魚は川の流れに身を任せ、河口へと下って行きます。やがて海に出たアユの赤ちゃんは冬の間海で成長するのです。

近年では温暖化の影響で水温が高いまま秋に突入するケースが増えているので、落ちアユとなる時期がずれているとも言われます。海に下る時期が遅くなれば、それだけ生長期間が短くなり、未成長アユの遡上といった現象を生みます。多摩川はもちろん、全国の河川から昔より小さなアユが増えているという報告があります。昨年夏の特別展で展示した多摩川のアユも小型のものばかりでした。

多摩川アユの産卵場所は、河口から18km付近の国道246新二子橋から平瀬川合流点付近と考えられています。さらに遡って河口から25kmの粕江五本松の瀬でも行われているようです。この時期、下流の瀬にコサギやカワウなどの鳥が妙に集まっている場所は、そこが産卵場である可能性が高いと思います。

約半月程で孵化した多摩川アユの仔魚は、遊泳力がなく、瀬の急流に身を任せながら流される格好で東京湾を目指します。途中で傷ついたり、捕食されたりで、生まれた全てのアユが海に行き着くことはありません。これが自然の摂理というものでしょう。



# 美好町で旧石器時代の遺跡を発見！

美好町三丁目 府中市ふるさと文化財課 湯瀬 禎彦



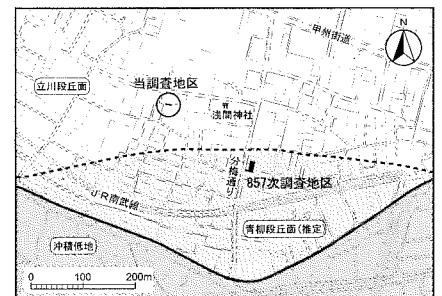
石器の出土状態

今回は、今年3月に美好町で発見された旧石器時代の遺跡を紹介します。発見場所は、分梅通り沿いに鎮座する浅間神社から約100 m西の住宅街の一角です。南側に多摩川の沖積低地と緩やかな斜面地の青柳段丘が広がる立川段丘の南部に立地します。この遺跡は、現在の地表面から1.8 m下の関東ローム層中で発見され、今から約2万年前のものと考えられます。

この遺跡の内容を具体的にみると、東西8.5 m、南北1.5 mの範囲に20点の石器類が分布していました。20点のうち、3点は黒曜石の剥片で、残る17点は4点が泥岩、13点が砂岩からなる拳大の礫です。黒曜石の剥片は、槍先などの石器を作る際に生じた石屑とみられ、すべて長野県産のものでした。砂岩と泥岩の礫は、いずれも被熱の痕跡を伴っているのが大きな特徴です。こうした状況から、この遺跡は、旧石器時代の人びとが黒曜石で石器を作り、礫を熱して食物を調理した痕跡と考えられます。

今回発見された遺跡は、立川段丘の南部に立地することに大きな意味があります。府中市内では、これまでに旧石器時代の遺跡が10か所以上確認されていますが、その多くが市内北方の野川流域です。一方、市内南方では、多摩川流域の立川段丘南部に位置する白糸台、清水が丘、分梅町の3か所で確認されているに過ぎません。このような状況から、今回、美好町で発見された遺跡は、野川流域に比べて旧石器時代遺跡のあり方が不明瞭な立川段丘南部において、新たに加わった情報として重要です。

今回紹介した美好町の遺跡は、縄文時代の落とし穴の調査中に偶然発見されました。この遺跡の南東150 mの分梅町（857次調査地区）でも旧石器時代の遺跡が確認されているため、美好町と分梅町付近には未発見の旧石器時代の遺跡が少なからず地下深くに眠っているのかも知れません。





連載

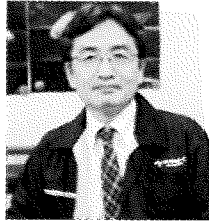
# 天文・宇宙の最新動向



## ⑦ 「はやぶさ2」宇宙へ

インタビュー：本間隆幸

前回までは「はやぶさ」を振り返りましたが、今回は12月3日に宇宙に旅立った「はやぶさ2」について引き続きミッションマネージャーの吉川真さんにお伺いします。



### Q. 「はやぶさ2」のミッションの概要は？

打上げ後、まずイオンエンジンなどのテストをして、1年後に地球に戻ってきてスイングバイをします。その後は徐々に小惑星「1999 JU3」に接近して、2018年6～7月に到着。一年半滞在して、さまざまな探査やサンプル採取を行い、翌年11～12月に出発します。2020年11～12月に地球に接近し、カプセルを届ける予定です。

### Q. 小惑星「1999 JU3」について教えてください。

小惑星は、太陽の光を反射して光っていて、その光の特徴から種類が分けられています。「1999 JU3」は、C型の小惑星に分類され、直径は900m、丸っこい形をしています。「はやぶさ」が探査した「イトカワ」はS型に分類されます。

S型が太陽系の小惑星帯の内側に多いのに対し、C型は小惑星帯の外側に多くあります。どちらの型も石質隕石と同じ物質でできていますが、成分が違います。S型は有機物や水をあまり含んでいないものですが、C型は水や有機物を含んでいて、炭素質コンドライトに対応すると言われています。

また「1999 JU3」は、太陽系ができた時の物質を保持していると考えられています。「はやぶさ2」は、そこからサンプルを持ち帰ることによって、46億年前に太陽系ができた当時の材料の中にあった、有機物や水、すなわち生物の原材料を直接探そうとしているのです。

### Q. 探査計画を具体的に教えてください。

探査内容は、「はやぶさ」とかなり似ています。まずは到着したら写真をたくさん撮って、表

面の様子を詳しく調べ、形を決定して体積を求めます。次に、探査機の運動から重力を決定し、質量や密度を求めます。また、水を含んでいる鉱物を見つけることができる装置を使って、有機物を採取したいと考えています。

加えて、小惑星の表面の物質は、太陽の光や放射線を浴び宇宙風化しているので、地下の物質も採取する予定です。これには、インパクトと呼ばれる衝突装置を使い、人工的にクレーターを作って地下の物質を表面に出します。そこに「はやぶさ2」を着陸させ、地下の物質を採取します。表面の物質と地下の物質の両方を持ち帰り、太陽系誕生時にどのような有機物があったのか、有機物が宇宙風化でどう変化したのかを解明したいと考えています。

### Q. その他にも探査計画がありますか？

ドイツが中心となって製作した「マスコット」という小型の着陸機を使って、地表の様子を調べます。「マスコット」に、表面を撮影するカメラや鉱物組成を調べる装置、熱の流れを測る装置などを搭載し、触りながら表面を詳しく調査していくのです。

他にもカメラや温度計を積んだ「ミネルバ2」というローバ（移動可能な小型着陸機）がありますが、これは表面をうまく移動できるかななどを調べる工学実験機として使用します。

### Q. 「はやぶさ2」に期待していることは？

「はやぶさ」が行った「イトカワ」の表面の様子は、行く前の予想と違い、クレーターは小さく大小の岩に覆われていました。今度の「1999 JU3」はC型という別の性質の小惑星ですので、どんな表面状態なのかが一番注目しています。

そのためにも、往復の運行や「1999 JU3」調査などのミッションが、トラブルなく進まないといけません。運用がうまくいくように、2020年の帰還まで、応援よろしくお願いします。

吉川 真 Yoshikawa Makoto JAXA 准教授

略歴：1989年東京大学大学院修士博士 現・情報通信研究機構を経て1998年より現職 太陽系天体や人工天体の軌道が研究対象